

椿山課長の七日間

2006(平成18)年11月18日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝河野圭太／原作＝浅田次郎『椿山課長の七日間』(朝日新聞社刊)／出演＝西田敏行／伊東美咲／和久井映見／渡辺典子／須賀健太／桂小金治／綿引勝彦／成宮寛貴／國村隼／市毛良枝／伊藤大翔／西尾まり／志田未来／沢村一樹／余貴美子(松竹配給／2006年日本映画／118分)

第4章

現代の世相を映し出す

……浅田次郎原作のタイムスリップもの『地下鉄に乗って』に続く、荒唐無稽な「蘇りもの」は、意外に充実度いっぱい！ 西田敏行扮する椿山課長ら3人が、三者三様に姿を変えて現世に「逆送」されてきたのは、やり残したことがあったためだが、全く無関係な3つの物語が1本の筋にまとまっていく構成力はお見事！ 「天下の美女」伊東美咲の代表作とするには抵抗感があるが、椿山課長の現世での姿、和山椿によるガニ股歩きなどの熱演に拍手！ 社会不安が増大し、家族の絆が次々と失われている昨今、できればこれほどの喜びと満足感の中、天国へ旅立ちたいものだが……。

『地下鉄』より『椿山』！

この映画は浅田次郎の原作を映画化したものだが、そのパターンでは、『地下鉄に乗って』(06年)がつい先日公開されたばかり。それには大好きな常盤貴子が出演していたこともあり10月28日に観たが、私の採点は星3つで、あまり芳しくない出来……。この『椿山課長の七日間』については、予告編を数回観ただけで西田敏行と伊東美咲が共演するマンガみたいな喜劇だろうと勝手に予想していたら、それは大まちがいがいった！ 『地下鉄』はタイムスリップものだったが、『椿山』は蘇りもの。そのどちらのパターンも、ストーリーをよほどきちんと構成しなければ不自然さが目につくもので、『地下鉄』はその点でダメだった。しかし『椿山』では、まず、主人公の突然死から「中陰役所」でのルール説明、そ

して主人公を含む3人だけがなぜ「逆送」されるのかが合理的に説明されている。そして、三者三様に姿を変えて現世に舞い戻った彼らが、一体何を目指し、何をやるのか、それを笑いと涙に包みながら、感動的な家族のヒューマンストーリーにまとめている点はお見事。私の評価では、同じ浅田次郎原作でも断然『地下鉄』よりは『椿山』……。

中陰役所のルールとは……？

映画は早く後半の複雑なストーリーに入りたいため(?)、冒頭の高島屋の婦人服売り場を担当する椿山和昭課長(西田敏行)の脳溢血による突然死の後、すぐに天国と地獄の中間点にあるという「中陰役所」の担当者マヤ(和久井映見)による手際よい説明のシーンに入っていく。その細かいルールは映画を観ていただくとして、現世への「逆送」が認められるためには厳しい審査がある。それにパスしたのは、椿山課長の他は、射殺されたヤクザの親分武田(綿引勝彦)と、実の親に一目会いたい小学生の雄一(伊藤大翔)の2人だけ。逆送の期間は死後7日間だが、中陰役所にたどり着くまでに既に4日経っているため、現世で過ごせるのは実質3日間だけ。しかも、①決して正体を明かさないと、②復讐は禁止、③制限時間厳守という3つの条件が付せられている。①の条件があるということは、現世では一体3人はどんな姿で……？

美女にも意外な面が……

私の大好きな映画『敦煌』(88年)で日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞した西田敏行は、その当時かなり精悍な体型と顔立ちをしていたが、その後『釣りバカ』シリーズの顔となってからは、どうも腹ボテ・短足おやじの代表のようになってきた。この映画が面白いのは、そんな椿山課長が現世に戻るについて変身したのが、今をときめく美女伊東美咲扮する和山椿だったこと。

美女はもちろんそれだけでお得だが、逆にそのイメージに縛られるためあまりケッチイな役をできないのが悩みの種……？ しかし、中谷美紀が『嫌われ松子の一生』(06年)で見事に変身したように、伊東美咲だってたまには変身しなければ……？ そう思いながら観ていると、この映画では天下の美女の意外な面が

いろいろと……。

そもそもこの映画は西田敏行主演だが、彼が登場するのは始めと終わりだけで、中盤は声の出演だけ……。それにひきかえ伊東美咲は、『釣りバカ日誌16 浜崎は今日もダメだった』（05年）でのお飾り役とは大違いで、男言葉での演技の他、ガニ股歩き、とっくみ合い、バーでのやけ酒などかなりの熱演。しかも、声優西田敏行（？）が声を出している時、彼女は表情だけで演技をしなければならないから静かな演技でも……。美女にも意外な面が……。

椿山課長の知らなかった「重大な事実」とは……？

椿山課長が現世への逆送を許可されたのは、突然死だったこともあるが、「重大な事実」を知らないまま死んだのがあまりに気の毒だからという事情があった。突然死の直後にそんなことを言われたら、誰だって気になるのは当然……。

その第1は、ローンでやっと購入したマイホームに引き取り面倒を見ていた椿山課長の父親昭三（桂小金治）が認知症を患っていたというのは真っ赤なウソだったということ。それは、そうすることが息子夫婦の家庭の平和のためにベストと判断したためらしい……。なるほど、これがマヤの言っていた「重大な事実」かと理解し、納得した椿山課長だったが、何と、「重大な事実」はそれだけではなかったから大変！ そしてそれは、男なら、夫なら、子を持つ父親なら誰でもアツと驚く、というより絶対に許せないような事実……。さて、それはナニ……。それは映画を観てのお楽しみに……。

第1のキーマンは嶋田クン……

この映画には椿山課長の職場の仲間が2人登場する。その第1は、椿山課長が信頼している部下の嶋田（沢村一樹）で、彼が浅田次郎原作の面白さの第1のキーマンとなる人物。椿の姿を借りて現世に戻った椿山課長が気になるのは、何とんでも残された家族すなわち、妻の由紀（渡辺典子）、長男の陽介（須賀健太）、父親の昭三の3人。したがって、椿は雄一の現世での姿、蓮子（志田未来）を連れてなつかしのマイホームを訪れたが、驚いたのは絶世の美女椿の訪問を受けた由紀。「あんな腹ボテ、短足の亭主にこんな美人の愛人がいたのか？」と勘繰っ

たのは当然で、椿が「そうではありません！」といくら否定しても通用せず、つかみ合いのケンカ同然に……。

そこに登場したのが、風呂上がりのガウン姿の嶋田クン。これは一体ナニ……？ なぜ彼がこの家にいるの……？ しかもガウン姿で……？ 椿の姿を借りた椿山課長は怒りでいっばいとなったが……？

第2のキーウーマンは同期の「戦友」知子……

椿山課長の職場仲間で、第2のキーウーマンは同期入社の子知（余貴美子）。彼女はデパート勤務にもかかわらず人見知りで口下手だったらしく、それをいつもフォローしたのが椿山課長。したがって、2人は強い「戦友」意識で結ばれていた。ちなみに、ある時一夜のハプニングもあったらしいが、その詳細はスクリーン上で……？

知子は未だに独身だが、空気のような存在でいつもすぐ側にいた椿山課長が突然いなくなったため、戸惑い悲しみにくれている様子。そんな知子が、同じ椿山課長の親友だという椿に出会ったのだから、こちらも女同士の闘いが勃発してもおかしくないのだが、なぜか椿には何でも自然に話しかけることができるため、知子自身もそれが不思議……。私たち観客の目から見れば、和山椿＝椿山課長なのだからそりゃ当然……。嶋田をめぐってはドタバタ劇が、知子をめぐってはしみり話が好対照に展開されていくところが、浅田次郎構想のミソ……？

雄一の親探しの旅は……？

逆送期間中、椿山課長は雄一の世話係も兼ねていた。雄一が一目実の親に会いたいと願っているのは、彼が3歳の時に里子に出されたから。したがって、親探しの手がかりは、親の名前を里親から聞き出すか、3歳まで雄一が育った施設から聞き出す他はない。ところが、そもそもその施設の名前さえ雄一はきちんと覚えていないから、全く手がかりなしというのが実情。しかも、雄一の現世の姿は蓮子という女の子。椿と蓮子はまず雄一の育ての親（西尾まり）の家に向いたが、どこの馬の骨ともわからない他人にそんな情報を教えることはできないと断られたのは当然だった。

『椿山課長の七日間』の構想がしっかりしているのは、主人公椿山課長の家族を中心とした人間関係の中で、雄一や武田の逆送の思いをうまく処理していること。パンフレットにも人物相関図「“逆送者”をとりまく人々」があるが、これを読まなくても、観客が多くの登場人物たちがピタリと落ちつくところを理解することができるように構成されている点は、実にお見事。

雄一が3歳まで過ごした聖信園という施設を探してくれたのは、かつて市役所で福祉関係の仕事をしていたが、今は認知症を患っているという昭三。また、以降聖信園への訪問を含め、ずっと一緒に協力してくれたのは椿山課長の一人息子の陽介。なぜそんなことになったのかは、椿山課長のマイホームを訪れた椿と由紀とのつかみ合いのケンカが大きなカギ。本来赤の他人である椿と蓮子が、少しずつ親探しの目標を実現していくことができる人間関係の面白さに注目……。

武田の思いは……？

武田が突然射殺されたのはある意味でヤクザの宿命だが、実はそれは人違いだったというからちょっと気の毒。殺し屋の本来のターゲットは、武田の弟分で市川組の組長市川大介（國村隼）だったのだ。しかし武田はそれでよかったと考えており、武田の2人の子分卓人（青木崇高）と純一（松田悟志）には復讐など考えず、組を解散シカタギの道を歩んでももらいたいと願っていた。武田が逆送を希望したのは、そんな思いを伝えるため……。

そんな武田の現世の姿は、イケメンのヘア・スタイリスト竹内弘実（成宮寛貴）という似ても似つかぬもの。しかしながら、これなら「僕は武田の息子です」という説明ができるため、武田にとっては好都合。市川も「武田の兄貴にこんな立派な息子さんがいたなんて、全然知らなかった」と言いながら、次第に打ち解け、妻の静子（市毛良枝）を交えながら次第に信頼関係を築いていくことに……。竹内が武田組を訪れ、デッチあげたオヤジの遺言状を示すと、単純な純一はすぐに納得。しかし、一途に復讐を誓っている卓人のアパートを訪れてみると、既に卓人は復讐の実行に移っている様子。そこで竹内はピタリと市川に付き添ってガードしようとしたが……。

ここらあたりまでは、武田と竹内そして市川夫婦の物語は椿山課長とは全く関

わりのない、ヤクザの抗争劇の延長の物語。それが、がぜん『椿山課長の七日間』という統一的な物語の中に入り込んでくるのは、実は市川と静子には一人息子がいたところ、市川が服役中にその最愛の息子を手放し、施設に預けたことを悔やんでいるということが判明した時から。すると雄一の父親はひょっとして……？ そういえば、雄一の父親は「怖い職業の人」と言っていた……？

ヤクザだって、覚醒剤で儲けたり、むやみに暴力を振るって威嚇する奴ばかりではなく、古き良き任侠道を実践している奴もいる……。顔が怖いからヤクザそのものの雰囲気だが、そんなことを信じさせるに足る心やさしいヤクザが武田と市川。子分を思いやる心やわが子をいとおしむ心は、ヤクザもカタギも同じ。この物語の展開の中からそんな心温まる感動を、きっとあなたも味わうことができるはず……？

充実した3日間！ 充実した大団円！

現世にいることができるのは3日間だけ。三者三様に姿を変えて現世に降り立った3人の腕には、タイムリミットを正確に刻む特殊な時計があった。

最初に現世での思いをクリアしたのは、竹内の姿を借りた武田。卓人の襲撃を受けて市川の前に盾となって立ちふさがった武田は、まず最初にその思いを十分満足させて天国への帰路に……。続いて、雄一も蓮子の姿を借りてではあったものの、実の父母と涙のご対面をすることができた。したがって十分満足して、天国への帰路へ……。そして最後に、「戦友」知子と2人だけに通じるブロックサインで「好きだよ」と意思を伝え合った椿山課長が、さあ天国へ帰ろうとすると、そこには都合よくポックリと逝った(?)道連れの昭三が……。

中陰役所で不安な顔をしていた椿山課長、武田、雄一の3人は、今や現世で思い残したことをすべてやり尽くした満足感いっぱいの顔で、再びマヤと対面することに……。さらに、椿山課長には新たな天国のお仲間も。こんな死に方ができれば、3人いや4人は十分満足なはず……。

少子高齢化が進む中、介護体制の不十分さや死を迎える心構えの不十分さが目につく昨今、こんな風に安らかに喜んで天国へ行けることを誰もが望んでいるはずだが……。

2006(平成18)年11月20日記